

郷土博 通信

No.12

2018 秋



紙腔琴 (解説 6 頁)



CONTENTS

■ 紙腔琴	1	■ 『紙腔琴』について	6
■ 展示室紹介	2~4	■ INFORMATION	6
■ つまみ細工体験講座	5		

第1展示室

讃岐のやきもの

讃岐では古代から須恵器や瓦などのやきものがさかんで、讃岐国府近くの陶(綾川町)には数多くの窯跡が残されています。

近世に入ると、大名の間で茶陶がもてはやされたことや、文禄・慶長の役の際に日本へ渡来した陶工により大陸の技術が持ち込まれたこと、藩の産業振興策等により、新たな陶磁器が次々と生まれました。このようにして誕生したやきもののうち、代表的な理兵衛焼(理平焼)と源内焼(志度焼)をご紹介します。

理兵衛焼(理平焼)

森島作兵衛重利(?-延宝6年・1678)は、栗田口で京焼の陶工をしていました。京焼とは、桃山時代以降に京都で焼かれた陶磁器の総称で、茶の湯の興隆とともに発展し、明暦初年(1655)頃、野々村仁清により完成されました。

高松藩初代藩主頼重は重利を高松へ呼び寄せ、御用焼物師として登用し、栗林荘の北に屋敷と陶窯を与えたといわれています。重利の作品は京焼の流れを受け、優美な色絵が施されたものが多く、名を紀太理兵衛と改めたことから、理兵衛焼と呼ばれました。紀太理兵衛の名は代々襲名され、明治維新を経て理平と改め、現在も栗林公園北門近くの窯場で作陶を続けています。

源内焼(志度焼)

平賀源内(享保13年・1728-安永8年・1779)は長崎へ遊学の際、阿蘭陀焼や交趾焼が高値で買い求められているのを見て、質の良い国産陶器を作れば内需が拡大する上に輸出もでき、国益になると考えたことから、それらの技法を真似た源内焼が生まれました。

源内焼は緑や黄、褐色などの鮮やかな色合いが印象的で、鑑賞することを意図したといわれています。それを特徴づけている皿は、見込み(内側)に大胆な図柄を配し、縁は額縁を思わせるような細かな装飾が施されています。

源内が意匠指導を行い、源吾、松山、舜民、民山らの名工が生まれました。源吾はそのまま源内焼の陶工として生涯を終えますが、他の人たちはそれぞれ独自の境地を開拓し、松山焼、舜民焼、民山焼と称されました。

今回の展示では、他にも讃窯、富田焼、庸八焼、屋島焼などをご紹介します。それぞれのやきものをお楽しみください。
(宮武 尚美)



▲理兵衛焼(理平焼) 火鉢



▲源内焼(志度焼) 三彩五鳥文皿

第2展示室

久米通賢の海岸測量 — 御供所から大槌島を望む —

文化3年(1806)、久米通賢は、高松藩の命により高松藩領内の測量に着手しました。同年11月14日に引田浦通念島(東かがわ市引田)から始め、海岸部を東から西に移動し、現在の高松市域をへて12月10日に坂出市域の北木沢浦(坂出市王越町)、11日に乃生浦、大藪浦、林田浦、12日に坂出浦、御供所浦、そして鵜足津浦(宇多津町)をへて14日に土器川東土手(丸亀市)に至っています。

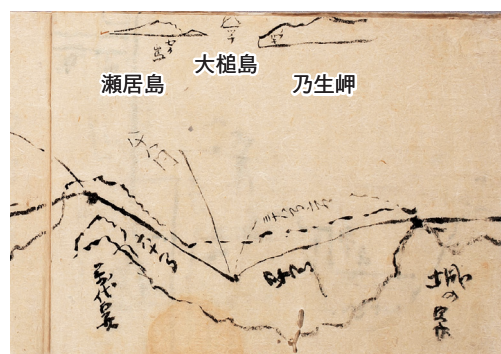
久米は自作の地平儀等を用いて、現在地から次の目標地点までの方位と距離を計測し、また、瀬戸内海に浮かぶ複数の島々を目標物として、その方位も測量しました。

坂出市域では、上記6ヶ浦で測量し、1地点で20から40ヶ所の目標物の方位を計測しています。目標物としては、大槌島、沙弥島、瀬居島、三ツ子島、与島、岩黒島、櫃石島、下津井燈明堂など、坂出市域から見える瀬戸内海の島々の東西の先端や山や岬など、確認しやすいものを選んでいきます。

久米が記した「側(測)量絵図帳」には、御供所浦周辺の海岸線が記されていますが、上部には「セイ島(瀬居島)」、「ツチ(大槌島)」、「ノフサキ(乃生岬)」が並ぶスケッチも描かれています(図1)。また、測量データをもとに作製された「御内御用測量下図(西)」には、御供所と大槌島を結ぶ斜線がかすかに残っていて、久米がスケッチを描いた時の立ち位置からの延長線を示していると思われます。瀬居島東端と乃生岬とのわずかな空間(海面)に大槌島がすっぽりと納まる風景(図2)が見られるのは、陸上では御供所の海岸部の一部に限られています(図3)。久米は意図的にこのポイントを選び、精度の高い測量を行い、より正確な地図を作製しようとしたと思われます。

この久米の測量の2年後、文化5年(1808)に伊能忠敬が讃岐の測量を実施、久米は藩から測量隊の接伴応接役を命じられます。すでに自らの手で測量を行っていた久米は、伊能の測量をどう見ていたのでしょうか。また、久米が目標物とした島々には、現在、瀬戸大橋を支えている櫃石島、岩黒島、与島なども含まれています。およそ180年後、この島々に巨大な橋が架けられることを久米は想像したのでしょうか。

(齊藤 祐司)



▲図1 「側(測)量絵図帳」
(御供所周辺と、大槌島を望むスケッチ)



▲図2 坂出市沖の浜から、瀬居島と乃生岬の間に見える大槌島



▲図3 「御内御用測量下図(西)」部分拡大

第3展示室

明治・大正・昭和初期の旅

庶民の間で「楽しむための旅」が盛んになったのは、江戸時代中期のこと。お伊勢参りや金毘羅参りなどの寺社詣での名目で、温泉につかり、景色を楽しみ、美味しいものを食べる物見遊山の旅でした。

江戸時代末頃までは、陸上での移動手段は徒歩、まれに駕籠か馬、水上では大小の和船が主でしたが、明治維新を迎えると、西洋近代文明の流入に伴い、人びとの移動や旅のかたちも大きく変化し始めます。明治5年(1872)に新橋―横浜間に鉄道が開通したのをかわきりに、各地に鉄道が敷設され始め、「鉄道旅行」という新たなスタイルが誕生しました。四国島内での最初の鉄道は、明治21年(1888)に伊予鉄道が松山―三津間で開業、翌22年(1889)には讃岐鉄道が多度津を起点に丸亀―琴平間で開通。さらに明治30年(1897)には高松まで延長し、岡山―高松間の讃岐汽船航路との連絡航路を開始しました。温泉保養や寺社参詣という観光目的が端緒となったようです。

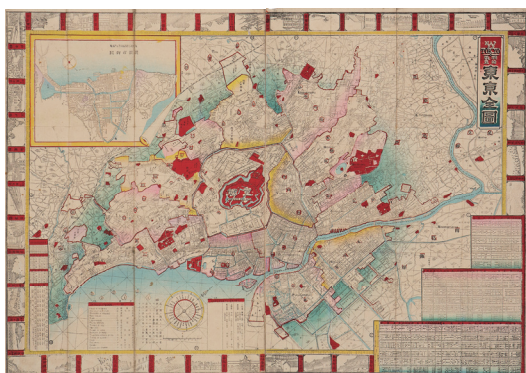
全国の鉄道網が整備された明治中頃には鉄道の旅が盛んになり、さらには大型化・高速化した船舶を利用した国内をはじめ、海外への船旅も普及し始めました。明治末頃になると、北海道から九州までが旅行の目的地となり、大正期から昭和前半期にかけて大きなブームとなっていきました。

また、旅の案内書も旅行スタイルの変化や印刷技術の発達により、大きく変わりました。徒歩での旅が中心であった江戸時代には、「道中案内記」や「名所図会」「紀行文」などが板行されましたが、明治時代になって鉄道が導入されると、「鉄道旅行案内」をはじめ、江戸時代の名所図会類の再版や新たに編集された「名所図会」などが数多く出版されるようになりました。

時代と共に、旅のスタイルは変わりますが、心のゆとりと豊かさを求めて旅に出るのは、昔も今も、そしてこれからもそれほど変わらないのではないのでしょうか。

今回の展示では、『大日本鉄道線路全図』(明治27年刊)、『東京全図』(明治26年刊)、『錦絵讃岐名所』(明治34年刊)、『全国旅行案内地図』(昭和9年刊)をはじめ、さまざまな旅行案内書、紀行文、旅行記、絵葉書等から「明治・大正・昭和初期の旅」をご紹介します。

(吉久 由紀子)



▲東京全図



▲錦絵讃岐名所「瀬居島鯛網」



▲全国旅行案内地図

つまみ細工体験講座

つまみ細工の体験講座を終えて

櫛橋 利恵(はな華工房)

つまみ細工は江戸時代に生まれ現在に続いている伝統工芸の一つです。

糸も針も使わず小さな布を折り畳み、形にしています。

日本独自の技法ですね。

つまみ細工が生まれた頃は女性の簪かんざしが主流でしたが時代と共に形を変え、現在では髪飾りをはじめ、花や動物を作って色紙にしたりアクセサリーなどにと多様な形に変化してきました。

本日の体験講座では、つまみ細工の畳み方が十数種類ある中の基本中の基本である『剣つまみ』という技法を使い、はりねずみのブローチを作りました。

講座に来られたほとんどの方が初体験という中で小さな布を手にして、ピンセットを使って折っていく作業には苦戦した事と思います。糊のつけかたや、生地扱いを説明しながらテーブルを回るうちに、小さな剣つまみのパーツがどんどん完成していきました。

小さなお子様はご家族の方に手伝ってもらい、あーだ、こーだと言う声があちこちから聞こえとても微笑ましく感じました。

次に、出来上がったパーツをはりねずみ型の台に貼っていくのですが、ここからが皆さん楽しかった様です。苦戦して作ったパーツが綺麗に並べられ、はりねずみが立体化し形になって行くのでワクワク気分ですよね。最後にビーズの目と鼻を付けてブローチの完成です。

「可愛い」「楽しかった」「来て良かった」とのお声を頂き、また興味を持った方とは色々とお話ができ、とても楽しい体験講座でした。

つまみ細工は、どんな生地でも作れますから、難しいと先入観を持たず、折り紙を折る要領で作ってみてはいかがでしょうか。

手づくりの楽しさを知るとともに、伝統工芸に目を向けて頂けたら幸いです。



▼体験講座風景(平成30年7月28日)



紙腔琴は、明治17年(1884)、戸田欽堂(1850-1890)によって考案され、銀座の楽器店で売り出された、自動演奏装置です。演奏技術が無くても、ロール状の譜面を装置にセットしてハンドルを回せば、誰でも音楽を奏で、また、それに合わせて歌って楽しむこともできたため人気を得ていました。しかし、明治後半期に蓄音機が輸入されると次第に衰退しました。

蒔絵の施された漆塗りの木箱の中には、フリーリード(自由簧)と鞆が仕掛けられています。フリーリードは、ハーモニカのような形をした小さな方形の孔に音階順に収められています(図1)。ハンドルを回すと、空気が鞆に取り込まれ、箱の中央上面のフリーリードに送り込まれ、その上部にセットされた譜面の孔の部分を通る時に音が鳴るとい仕組みです。

「活奏曲譜」(図3)と称されたロール状の譜面は、楮紙を貼り合わせて礬砂^{どうさ}をひき、楽曲に合わせて四角い長短の穴を開けたもので、「長唄」「地唄」「清元」「唱歌」「軍歌」などさまざまなジャンルのものがありました。譜面の巻頭には「私は或る日偶然に、こわれた窓が風に吟ずる現象を見てヒントを得、西洋の自動演奏装置を参考にして(紙腔琴を)作った」という戸田欽堂の言葉が記されています(図2)。

戸田欽堂は、嘉永3年(1850)、大垣藩主戸田氏正の子として生まれました。明治4年(1871)に藩知事であった兄に同行して渡米、帰国後洗礼を受け、同7年(1874)、聖書やキリスト教関係の書籍を販売する目的で東京銀座通りに、「十字屋」を開店しました。その後、考案した紙腔琴を店先で演奏しながら聖書等を販売したところ、紙腔琴にも注目が集まり、やがて大人気を得たということです。

かつてはさまざまな曲を奏で、人びとをなぐさめ楽しませたと思われるこの紙腔琴からは、長閑でどこか懐かしいような音色が聞こえてくるような気がします。

(吉久 由紀子)

INFORMATION

■ 鎌田共済会郷土博物館第9回公開講座

人形をめぐる対談

『人形—この未知なるもの』

平成30年10月27日(土)

13:30~15:00(受付13:00)

会場:四谷シモン人形館 淡翁荘

講師:四谷 シモン(人形作家)

対談者:菅原 多喜夫

(翻訳者、四谷シモン・アシスタント)

参加費:2,000円(入館料含む)

【申込10月2日(火)から、先着50名】

電話・FAXかHPのフォームからお申込み下さい。

電話:0877-46-2275 FAX:0877-45-0035

HP:https://www.kamahaku.jp/



鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分

岡山から…快速マリンライナーで約40分

JR予讃線坂出駅から徒歩5分

※駐車場あり

開館時間:午前9時30分~午後4時30分(入館は4時まで)

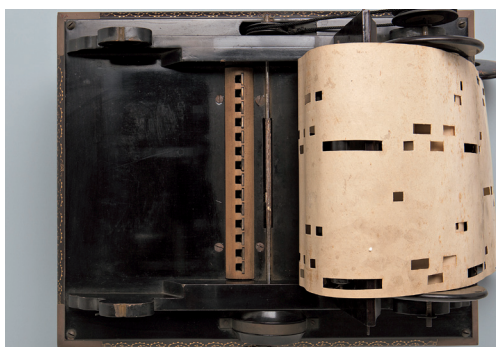
休館日:月曜日/祝日

夏季特別(8月13日~15日)

年末年始(12月29日~1月4日)

入館料:無料

※礬砂…膠とミョウバンを溶かした水。補強やにじみ止めとする。



▲図1 フリーリードの部分



▲図2 「活奏曲譜」の巻頭部分



▲図3 「活奏曲譜」